自然と歴史をたたえる洗足池公園で秋の散歩を

文・街の手帖編集部

東京と神奈川を結ぶ中原街道沿いにたたずむ洗足池は、一周約 1.2 キロほど。池上線・洗足池駅を降りてすぐ現れるこの池は、ゆっくり歩いても約 30 分ほどの小旅行が楽しめる景勝地として慕われてきました。

もともとは「大池」と呼ばれていたこの池は、かつて日蓮聖人がこの池に立ち寄った際、足を洗ったことから「洗足池」と呼ばれるようになったと伝えられています。

池のほとりには、江戸無血開城などで知られる勝海舟の夫妻の墓をはじめ、その背後には昨年オープンしたばかりの勝海舟記念館が建っており、大田区の新しい観光名所として注目を集めています。

毎年 11 月中旬になると、池のほとりにはノギクなどの秋の花が咲き、ほかにも秋の風物詩とも言える柿の実や、夏みかんが見られます。秋に夏みかん?と思うかもしれませんが、夏みかんは 6 月頃小さな実がなり、夏、秋と次第に実を大きくして食べごろは春頃だそうです。鮮やかなカンツバキの花も見事です。

この時期、渡り鳥であるユリカモメやオナガガモなどのカモ類も飛来します。朝早く訪れれば、珍しい野鳥を観察することもできます。

また、池の奥には千年以上の歴史がある千束八幡神社があり、その境内の右手の広場には「池月」と呼ばれる馬の像が建っています。

かつて源頼朝が鎌倉に向かう途中、ここ洗足池で野営をした際に、どこからともなく馬が現れ、その姿が「池に映る月影のよう」であったことから「池月」と名付けられたそうです。普段は、地元の人たちがこの池月の像のある広場で太極拳を行う姿も見られ、ほのぼのとした気分にさせてくれます。ちょうど高台になっているので、ここからの池の眺めもいいものです。

都内でも珍しい、自然と歴史をすぐそこに感じることができる洗足池公園。多摩川散歩とあわせて水辺の旅として巡ってみてはいかがでしょうか。

写真協力：社団法人 洗足池風致協会

グランデュオ蒲田

徒然日記 VOL.02

Granduo Kamata

文・天沼佐知恵

昔懐かしい味

グランデュオ蒲田は駅ビルということもあり様々なお客様がいらっしゃる。

地方から東京にいらした方、生まれも育ちも東京の方。

私たちが携わる北海道から九州までの、いずれかの小さな村を知っていて、ご縁のある方が時折いらっしゃるのに驚く。「姪が、音威子府村（北海道）の工芸高校に通っていたのよ。」「新庄村（岡山県）の、ひめのもち美味しいよね。」「檜枝岐村（福島県）の農村歌舞伎、よく見に行ってたよ‥。」あらためて、東京は様々な郷里をもった方が暮らしているのだなと思わされた。

先日、大川村（高知県）のお茶「玉緑茶」を購入してくださったお客様が、こんな感想をもって立ち寄ってくださった。「このお茶、美味しかった！ 懐かしい味がした。」嬉しかった。御菓子や加工品ではなく、お茶に懐かしさを感じていただけたというのが嬉しくて、そのお客様の丁寧な暮らしぶりも彷彿とさせられ、昔懐かしい日々への郷愁や哀愁、なんとも言えない深いものを感じたのである。

「昔懐かしい味」。それは最高の誉め言葉かもしれない。今は、美味しいものが巷に溢れているし、ネットをみれば、☆でも評価される時代だ。かつては「ハレの日」の御菓子や食品だったものも、ハレの日だけでなく、毎日の日常で食べられてしまう現代だ。そんな現代だからこそ、素朴で、ほっとする「昔懐かしい味」は、かえって贅沢な、大切なキーワードなのかもしれない。

私たち「小さな村 g7ギフトショップ」は、そんな手作りの懐かしい味や、ほっこりする美味しさ、小さな村の生産者たちの思いも込めて届けられたら嬉しい。

秋深まり、ますます寒くなってきたこの季節、私もあらためて時間をとって、じっくりとお茶を味わいたくなった。